

特別寄稿

にしきてんまんぐう
錦天満宮所蔵「諸職風俗図」について

奥平 俊六

前言

平成29年12月、かねてから錦天満宮の調査を進めておられた下坂守氏（京都市文化財保護審議会委員）の御紹介で、所有する古文書の寄託と絵画の調査についての依頼を受け、京都市文化財保護課・京都市歴史資料館が同社を訪問した。この時、蔵から大破した屏風が見つかった。画面は茶褐色に変色し、何が描かれているのかを判別するのも難しい状態であったが、職人尽図と邸内遊楽図が合わさったような珍しい図様であると思われた。所有者に、稀少な作品である可能性が高いので、修理について打診したところ、御快諾をいただいた。修理は、平成30年度事業として、京都府文化スポーツ部文教課（当時。現文化政策室）及び公益財団法人京都市文化観光資源保護財団の未指定文化財修理の補助金を使い、株式会社修美において行われ、平成31年3月に竣工した。

奥平俊六氏には、修理前から作品の絵画史的な位置づけ等について御助言をいただき、修理中には、京都市文化観光資源保護財団の専門委員として、修理所にも足を運んでいただいた。今回、修理が完了したのを機に、その折の所見を作品紹介として御寄稿いただいた次第である。

なお、本稿に使用した作品の画像は、修理終了後の写真で、すべて株式会社修美から御提供いただいた。
（京都市文化財保護課 安井雅恵記）

錦天満宮は京都市中京区、繁華な錦小路の東の端に位置する。その錦天満宮に職人を描く屏風が所蔵されていることが最近明らかになった（図1）。六曲一隻の押絵貼おしえはりで、縦長の画面が六面。右から順に、甲冑師（第一扇）^{うつぼ}、琴師（第二扇）、^{うつぼ}、

扇かざり、弓師（第四扇）、^{かざり}、^{ようきゆう}、表具師（第六扇）を描く。それぞれ縦長の画面を生かして、店棚と工房をともに描く点、楊弓や囲碁などの遊楽場面も描き込まれている点などその描写内容はたいへん興味深い。一扇ずつやや詳しく紹介しておく。



図1 全図

1. 甲冑師

本図の特徴の一つに建物が大きいことがあげられる。職人を描く洛中洛外図や喜多院本系の職人尽図の場合、あくまでも町家の店頭の描写だが、本図の場合は豪壮な屋敷であることが多い。

この第一扇、甲冑師の家の描写（図2）はとくにその感がつよい。まず花頭窓を備えた立派な長屋門があり、長屋塀が続く。玄関を入ると中庭があり、広い二階屋が描かれる。長屋塀には格子窓があり、板張り部分の描写も精細だが、下部の張り板の木目が水墨画風でまるで水流のように見える。建築物の描き込みも周到で、中庭に面した濡れ縁の側には手水鉢が描かれ、柱には数寄屋風の自然木が使われている。

本図のもう一つの特徴として、接客の情景を描くところがあげられる。この第一扇には、門を入ったところにある座敷に客が坐り、そこに茶を運ぶ女性も描かれ、さらに長屋門にはその客の従者も描かれる。客の小袖には桜花文、羽織には九曜文があり、その前に煙草盆が置かれ、客は閉じた



図2 第一扇下部

扇を二本の指の上に載せている。何か^{とうせん}投扇のような遊びに興じているのかもしれないがよくわからない。一方奴姿の従者の着物には丸に十文字の文様があり、上がり^{がまち}框で布巾を使っている。客に対応する男の着物には丸に梅鉢文がある。その奥に、場合によっては三階建てにも見えるような豪壮な二階屋が展開するのだが、これはさまざまな作業を見せるための工夫なのだろう。客の様子を描くのも店の活動の全体を見せるためと考えられる。

客のいる座敷から続く奥の部屋では甲冑



図3 第一扇上部



図4 『和国諸職絵つくし』 鍛細工
(国立国会図書館蔵)

の大袖や草摺を制作している(図3)。小槌ややっこなど道具も精細に描かれる。作業中の職人の小袖に源氏香文が見える。ちなみに胴や草摺を吊るして作業するさまは『和国職人絵つくし』(菱川師宣画、貞享2年〈1685〉刊)の「鎧細工」(図4)の描写に近い。二階の手前の部屋では鋏形を作っているが、小槌を打つ職人の眉間の皺が印象的である。その右手奥の部屋では、珍しい手甲と腕甲の作業が描かれている。木製の腕型に取り付けたまま^{たらい}盥に漬けているところを見ると、これをそのまま乾かして形を付けるのであろう。

このように甲冑師のさまざまな作業を描きつつ、部屋の奥には、完成した草摺や兜、あるいは朱塗りの箱が置いてある。工房の様子をできるだけリアルに伝えようとしているが、建物は柿葺きの屋根と壁の位置が一部矛盾しているところもある。工房の内部まで見せようとする工夫の結果であろう。



図5 第二扇下部

2. 琴師

第二扇には、黒白二つの暖簾に「琴」の文字が見えるように、琴師が描かれる(図5)。琴の制作ばかりではなく、三味線や琵琶^{じんりんきんもうず}も作られているが、これは『人倫訓蒙図彙』(元禄3年〈1690〉刊)の挿図(図6)においても琴の作業する後ろに三味線と琵琶が立ててあり、説明に「琵琶, 琴, 三味線, 同職也」とあるように、「琴師」は広く楽器制作者、工房を指す言葉であった。

第一扇の甲冑師と違い、琴師は立派とはいえ町家として描かれる。店頭にはぼったり床几があり、まず「琴」と書いた白い暖簾の左右に作業場がある。左手のぼったり床几の上には庵形^{いおり}の衝立看板があり、朱の地に三味線と撥が描かれている。看板の右手にはちょうど三味線に皮を張る男がおり、左手には棒状のものを持って琴を作る男がいる。その奥にも琴を作る男、そしてその後ろの三段の棚には、琴、三味線、琵琶などが置いてある。背後の黒地の暖簾にもやはり「琴」の文字があり、手前と奥に



図6 『人倫訓蒙図彙』巻六「琴師・弓師」
(国立国会図書館蔵)

設えられた黒白の暖簾によって店の奥行きを暗示している。

白い暖簾の右手にも作業場があり、こちらのぼったり床几には囲いがある。手前の職人はやはり三味線の皮を張っており、奥の男はもろ肌脱ぎで琵琶を作っている。作業中の男に茶を運ぶ切り禿かむろの女の子がいる。奥の床に琵琶と琴、右の戸袋の上の棚には完成した三味線が置いてある。三味線の皮を張る作業がその道具とともに描かれているのはたいへんめずらしい。庵看板の絵柄にもあるように、楽器製造の中心は近世初頭に歌舞伎の隆盛にともなって爆発的に流行した三味線であったことがわかる。

二階の右手は虫籠窓むしこのある漆喰壁で、襖を隔てて左手に青畳の座敷がある（図7）。この店の場合は、二階の座敷が接客に使われている。床の脇に琴が立てかけられており、右奥に客らしき羽織の男、その手前に扇子を持った男が坐っている。そして、左手の男は箱から出した三味線を弾いている。試し弾きや商談が行われているのかもしれない。

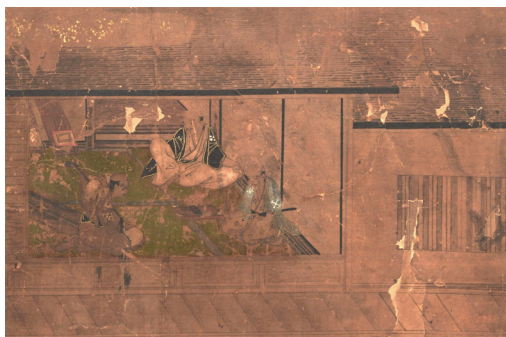


図7 第二扇上部

3. 鞆師

第三扇には、矢を収納する鞆（空穂、箆）を制作する鞆師が描かれる（図8）。一階が店、二階が作業場である。入口の左手に、見切れているが鞆を描いた看板がある。鞆は喜多院本では泥障あおり、弦巻つるまき、行膝むかばきなどとともに馬具師の店に描かれており、洛中洛外図などで製品が武具甲冑とともに店頭飾られている場合もあるが、専門の店が描かれることはめずらしく、この看板の描写もきわめて希少である。

格子窓の向こうの左側に主人らしき人物と茶を運ぶ女性がおり、右側に品物を見定める客らしき黒羽織の武士がいる。表には毛槍を持った奴など何人かの配下も待たせており、この客が身分の高い武士であることを示している。奥には漆塗の鞆がいくつ



図8 第三扇下部



図9 第三扇上部

か並べられており、煙草盆も置いてある。軒庇の上の格子窓からは、鞆を調整している男も垣間見える。

二階の左手は虫籠窓のある漆屋造で、右手が作業場になっている(図9)。本図の建築描写の特徴として細部の精密さがあるが、この店の結構にみる軒庇や卯建、あるいは樋などそれぞれの複雑な構造がわかるように細部まで描かれている点はとくに興味深い。

二階では四人の男がさまざまな作業を行っているが、奥で手に煙管を持って作業を見る男が頭領かもしれない。左に出来上がった鞆を木箱に収める者、真ん中に鞆の塗りの竈の部分进行调整する者がいる。その右には鞆の下地の木組を作る作業も見えるが、これら鞆制作の作業工程が細かく描かれていることはたいへんめずらしい。

人物の着物の文様は桜花文などありふれたものが多いが、二階の職人の一人が着ている小袖には珍しいさいころ賽子文様が見える。

4. 弓師

第四扇は弓師である(図10)。琴師の店と同じように、玄関の真ん中にかけてられた白い暖簾に「弓」の文字がある。街路には、洛中洛外図など都市風俗図によく描かれる西国三十三か所巡りのような成りをした二人連れの巡礼を描く。

暖簾の左側のぼったり床几の上で弓のしなり具合を確かめる男がいる。これに近い図像は職人尽絵にも版本にも弓師を描くときにしばしば用いられるが、これはもともと歌合絵に描かれた弓師の図像に由来する。その奥では竹材を火鉢にかざしてたわ撓めながら作業する男たちがいる。

一方、暖簾の右側では矢を火鉢にかざして調整する二人の男がいるが、その背後に立て回された枕屏風には矢羽が用いられている。このような矢羽をアレンジした枕屏風は喜多院本「職人尽図」をはじめ矢細工師を描く他の図にもよく描かれている。ちなみに喜多院本では弓師と矢細工師が別の図に描かれているが、本図では土間の左右に振り分けて描かれている。



図10 第四扇下部



図11 第四扇上部

二階の座敷では、的が用意されて実際に弓が使われている（図11）。二人の男が弓を射ているので客の試射ともとれるが、小さな的の形状や手前に坐る切り禿の少女や若衆を見ると、楊弓場のような雰囲気がある。楊弓は同時代の邸内遊楽図にもしばしば描かれ、本図の二階建ての建造物の描写が邸内遊楽図の描写に通じるところがある点とも符合している。ちなみに『人倫訓蒙図彙』には弓師（図6）とは別に楊弓師、楊弓矢師の項目があげられている。

最上段に瓦屋根が見えるが、その冠瓦上には防火壺が設置されている。

5. 鋳師

第五扇は鋳金物を造る鋳師（図12）。まず、店の玄関で暖簾をかけようとしている後ろ姿の女性を描く。朱の前掛けをしているが、小袖には大胆な花の文様があり、寛文小袖の影響がみえる。

街路側の張り出した部分に板囲いがあり、その囲いに庵看板が掲げられてい

る。朱の地に扇、結び文などの文様が金泥で描かれているが、もう一つの六角形の文様はおそらく吊り灯籠を上から見たところと推定される。というのは、店の奥に置かれた完成品の中に、鳳凰の造り物などとともに金属製の吊り灯籠が置かれているからである。

一階の左隅に炉が設えられており、火かき棒を手にした男が奥側に振り返っている。その小袖の背中には丸に十字文がみえる。炉には鞆、炭俵、金槌、やっこ、火かき棒など鍛冶の道具が描かれている。その手前には背中をまるめて鑢^{やすり}がけをする職人、右手には小槌で彫金をする職人、背後には茶を運ぶ女性がいる。

二階の左手には第三扇の鞆師と同じく、虫籠窓を備えた漆喰壁があり、その右方で三人の男が働いている（図13）。二人は大きな塗りの箱に金具を取り付けており、その右方で一人の男が鍍金^{めっき}の作業をしている。画面の損傷のため、その作業の詳細はわかりにくいですが、職人の周囲にはさまざまな道具が置かれている。

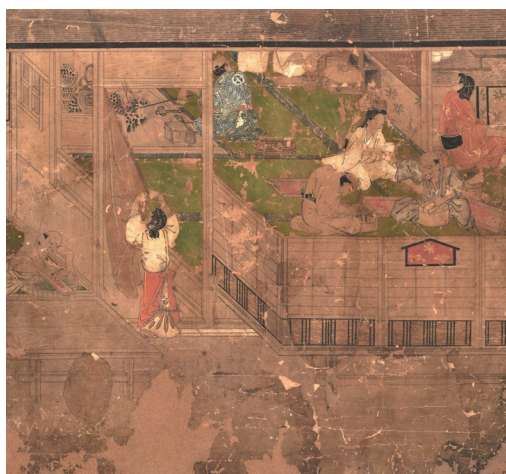


図12 第五扇下部



図13 第五扇上部

6. 表具師

第六扇には表具師が描かれる（図14）。『人倫訓蒙図彙』には経師、表具師（図15）、さらに表紙屋（図16）が別項になっているが、装丁作業などにはみな関わっており、その区分けは難しい。本図の場合は、とくに掛軸の表具の作業が中心に描かれているので表具師としておく。

ここまでの店がすべて二階屋であったのに対し、建物は平屋である。ただし、これまでの二階屋にもまして富裕な感じがある。手前に灯籠を配した築山があり、作業場は小柴垣で囲われた広い庭に面して開けている。その庭には水撒きをする下僕もいる。手前の母屋は藁葺きだが、奥の離れは柿葺き、そしてさらにその奥には瓦葺きの立派な土蔵が描かれている。

床の間を背にこちらを向いた髭の男が主人であろうか、手ぬぐいかけと糊盆を傍らに刷毛を持って糊付けしている。その前では職人が表具^{ぎれ}裂に定規をあてて裁断している。主人の背後の棚に多くの表具裂や紙の束が積んであり、手前には金欄^{きんらん}の表具を終えた墨竹の掛軸が置かれている。そして、広い濡れ縁をめぐらせた作業場の庭に面した柱のあたりには赤子を抱く妻女がいる。主人は桜、弟子は蕨、妻女は草花、赤子は紅葉の小袖文様である。

小柴垣の板戸を抜けて奥の離れに向かうと、二人の男が打ち紙の作業中である。ちなみに打ち紙の作業に用いている上から下げた杵のような道具は、喜多院本系「職人尽図」（「経師」ではなく「扇師」）にも描かれているが、『人倫訓蒙図彙』の「表紙屋」

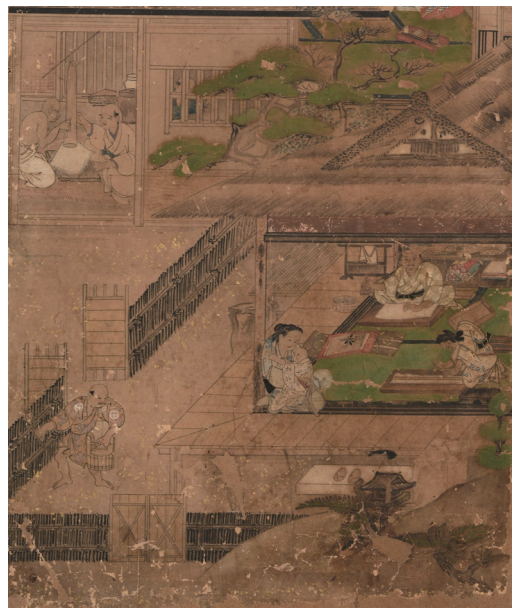


図14 第六扇下部



図15 『人倫訓蒙図彙』巻五「経師表具師」
(国立国会図書館蔵)



図16 『人倫訓蒙図彙』巻六「表紙屋」
(国立国会図書館蔵)

の挿図にもあり、その説明に「図中右上の道具は、下の輪を持って上下し、下に表紙を置いて、ならして堅くするもの。下げ槌というか」と注記されている。「サゲヅチ」が紙を打つ道具であったことは、慶長期にイエズス会が編んだ『日葡辞書』(1603-04年頃)にも出てくる。

格子窓の向こうにもう一人職人がいるが何をしているのかはわからない。そしてそのさらに右奥には二人の女性が向かい合って双六に興じているさまが描かれる(図17)。一人は絞り染め、一人は大柄な花文様の小袖を着ており、衣桁には色替わりの^{ことじ}琴柱文様の小袖がかけられている。水墨の屏風が立て回され、傍らには煙草盆も置いてある。この場面だけを見ると邸内遊楽図の一情景のようである。

人物描写は身体の割に手足、さらに指が大きく描かれるところに特徴がある。また、手元に力を入れるとき背中を大きく曲げる人物が多いがやや極端でデッサンのくるいも見受けられる。流派は特定できな



図17 第六扇上部

い。狩野派をほんの少しかじったようなところがあるが、狩野派によって定型化し、かなり流布した喜多院本系の職人尽図の図像的な影響はほとんど見られない。

制作期は小袖や結髪など風俗描写の特徴から、17世紀半ばから後半にかけてとみて間違いないだろう。この時期、洛中洛外図にも押絵貼形式の名所風俗図的な作例が増えてくることとも符合している。

多くの絵画の主題が^{つきなみ}月次の和歌などと連関して生成したように、職人という存在もまた歌合という、和歌から派生した遊戯の中で対象化され、そこで生み出された歌合絵によって視覚的に定着されていった。東北院、三十二番、七十一番など職人歌合絵巻が中世における職人図像に関する一定の地層を形成していく。近世初期に屏風貼交や冊子の形式で描かれる職人尽絵もまた、こうした古い歌合絵巻の地層とつながっていることは疑いない。ただ、それは直結しているわけではなく、一度洛中洛外図などの都市風俗図に描き込まれた店棚で働く職人の姿を経由して再生されたものであることは、かつて石田尚豊氏の指摘した通りである(「洛中洛外図屏風―職人歌合と職人尽絵を結ぶもの」『MUSEUM』112号、1960年)。歌合絵巻には背景描写はなく、店をのぞき込むように見る視点は、洛中洛外図などの都市風俗図を経由して初めて獲得されたものといえるからである。

川越喜多院に伝来した狩野吉信(1552-1640)の「職人尽絵」が近世職人絵の嚆矢であるかどうかはわからないが、この形式や図像を継ぐ作例はサントリー美術館本、

国立歴史民俗博物館本などかなりの数がある。それらは店の一間だけを見せる構図がほとんどだが、まれに喜多院本の縫取師のように一階を店、二階を工房とする例もある。本図はこの方向をさらに発展させたものといえ、喜多院本系が色紙形であるのに対し、縦長のプロポーションを生かして店奥の作業まで詳しく見せようと工夫しているところが最大の特徴であり、ユニークなところである。

本図は一隻で完結するものではなく、一双であった可能性もあるので、本来全体がどのような構成であったかは不明だが、少なくとも現存の六図を見る限りでは、手工業者たちの作業の実態を詳しく描くとともに、彼らの豊かさをも描く意図があるように思われる。あるいは対象の選択の時点で、富裕な手工業者だけが選ばれているのかもしれない。すなわち諸職をカタログ的に並べるのではなく、裕福な職人の姿やその店の様子を通して都市の繁栄を実感する、いわば都市吉祥図として描かれた可能性もあるのではなかろうか。

本図が描かれたと推定される17世紀半ばから後半にかけては、出版の時代でもあった。^{きょうわらべ}『京童』を初めとする京の一人案

内、いわば都市ガイドブックが相次いで出版され、そこには諸職の名人、名工が居住地ともに記され、多くの人がその情報を共有することになる。本図の図様とその構成にもこうした都市の現実がいくばくか反映している可能性も考えてみなければならぬだろう。

(追記)

過日、京都市の担当者から当該屏風について連絡があり、修理の相談を受けた。写真を拝見したところ、たいへん興味深い作品であったので、修理し永く保存した方がよい旨をお伝えし、その後修理所で進捗にあわせて何度か実物を拝見した。修理完了後、京都文化博物館に寄託されることになり、ちょうど同館で「道具と材料の職人譜」という総合展示が企画されており、急遽展示される運びとなった。本屏風は、すでにそのカタログ(2019年11月)に掲載され、同展企画担当者森道彦氏による簡明な解説が付されている。なお、本図の掲載を快くご許可いただいた錦天満宮様、および修理後の画像データを提供していただいた株式会社修美様に深謝いたします。

おくだいら しゅんろく
奥平 俊六 (大阪大学名誉教授)

